

研究会記録

発言者	発言内容
授業者	<p>本時までの学習では、手紙の中でお礼の気持ちをどのように表現すると相手に気持ちが伝わるかについて学級全体で考えてきた。また、日頃の日記指導やワークシートに書く中で、「ありがとう」のメッセージカードを貼る活動も取り入れてきた。そうした活動を通して、手紙の中でただ「ありがとう」という言葉だけで伝えるのではなく、活動内容や思いなどが具体的に書かれ充実した手紙をもらう方がうれしいと感じる子どもが増えてきて、お礼の気持ちがこもった手紙を書く今回の授業に至っている。お礼の気持ちを伝えるための内容を子どもたちがいろいろ考えられる授業を構成した。3人グループで考えたのは、アドバイスを複数もらえることで学びが深まるという思いからだ。どうしたらもっと子どもたちのお礼の気持ちが伝わる支援ができたのか、ご指導いただきたい。</p>
参観者	<p>自らの問いをもてない子に対してのアドバイスはどうしたらよいか。</p>
授業者	<p>話し合いの中で問いを見つけることもできるので、友達の意見を聞くことで問いをもつこともできるのではないかと考えている。本時はあまり自分が考えているような推敲ができていない気がした。一人一人をもっと見取っていくとよかったという反省点である。</p>
参観者	<p>この学年の子たちは活発だが、思っていることを相手に伝えるのが苦手だ。昨年度も書くことが苦手だったことを思い出す。しかし、下書きを見ると、子どもたちが気持ちを表現した手紙を書いていて、成長した子どもの姿が見られた。今日はオクリンクの操作に時間がかかる子もいたので、今後の改善点だ。教師側の意図をつかんでいない子もいて、今日は3人での活動がうまくいっていないグループもあった。</p>
参観者	<p>子どもたちが、タブレットを使って推敲したり、文を作成したりできていて素晴らしい。なぜ、「ありがとう」と思ったのか、どういう視点で感謝の気持ちをもっているのかを全体で深められると、本時の推敲にもいかされたと思う。そういう手紙をもらったらなぜうれしいのかを考えられるとよかったと思う。</p>
参観者	<p>「書く」授業を見られて自分の学びも深まった。事前に推敲する授業もされたのか。推敲する単元がこれまでにあったのか教えていただきたい。</p>
授業者	<p>推敲はこれまでに少し取り組んだ。線を引いたり、印をつけたりする仕方を練習してきた。しかし、もっといろいろな方法を指導し、推敲の機会を作っていたら、本時はさらに深まったと思う。</p>
参観者	<p>フィッシュボーンを使うことで、遠足の様子をふり返ることができた。本時は、授業者としては誤字脱字をなくすことより、内容面での工夫を考えたかったのではないと思う。これまで日記指導をしてきているので、誤字脱字の修正は日頃できてきている。本時は、お礼の気持ちが高まるような工夫を盛り込んでもよかったと思う。</p>
参観者	<p>「レベルアップポイント」の提示がたいへんよかったが、そのポイントは教科書等にあったのかについて聞きたい。ポイントに沿って友達の工夫を探したり、声かけができたと思う。子どもたちが「書きたい」という気持ちになることが大切だと思った。はじめ・中・おわりの「中」の部分の工夫がもっとあるとよかったと思うので、身近な相手に書く方法もあったのではないかな。</p>

参観者	「県庁」の見学に行ってどんなことを見学してきたか。教師が子どもたちにどのようなところを見てきてほしいか、どのようなことを学んでほしいのか、という視点はあったのかを知りたい。
授業者	今回は、県庁の仕事や徳島の名産等を教えていただいた。行く前は、まず県庁とはどのような場所なのだろうという疑問をもっていたが、県庁の仕事を理解したところで遠足での学びは終わった。
参観者	子どもたちを見取るところから授業が始まることや問いをもって学ぶことをいつも大切にしていることが伝わってきた。国語の力としてどのような内容にするかが「レベルアップポイント」で、「お礼の気持ちを伝えるためにどのような手紙を書くか」ということが問いである。「ありがとう」という言葉が子どもたちの手紙に直結している。しかし、本時は「ありがとう」ではなく、お礼の気持ちを伝えるためにどのような内容にするか、子どもたちが内容をどう深めていくかが授業のポイントとなったと思う。
参観者	タブレットを活用することで、書くことに抵抗を感じている子やうまく書けない子のハードルがとて下がり、書きやすさが出ていた。日頃の取り組みが充実していることがよくわかる授業だった。チェックポイント項目とレベルアップ項目が両方とも一緒に提示されたので、子どもたちはチェックポイントの方に気持ちが寄っていった印象がある。
参観者	目的意識をもって学習することや問いを追求していくことがよく出ていた授業だった。授業のあいさつなどからも学級の雰囲気がとてもよいことがわかった。子どもたちは、これまでに書いてきた手紙を友達に添削してもらって内容が変わってもよいという気持ちがあり、学級の雰囲気のよさが出ていた。平島小学校は見取りを大切にしているが、座席表からもその見取りがうかがえた。
助言者	学級全体に活気があり、子どもたちが日頃から問いをもって学習に取り組んでいることがよく伝わってきた。一人一人の問いは違うので、教師側がしっかり見取ることが大切だ。見取るとは、子どもを見取る、学力を見取る、興味関心を見取る、子どもたちの生活背景を見取る等、いろいろある。どんな問いをもっているかという見取りがあり、それぞれの目標が立ってはじめて学びとなる。「何を書こうか」という問いに対する答えが今日の下書きになっている。本時ではレベルアップポイントをもっと絞っていけば、子どもたちも考えやすかったと思う。子どもたちが何をしたいか、実態をしっかり見取ることが大切だ。お礼の気持ちをどのように表したらよいか、推敲する視点をもつために自分で問いをたくさん立てておいて、アドバイスや支援をすることが必要である。友達に言われて内容を変える、変えないという選択肢があったが、自分の思いや考えを大切に「変えない」という選択肢もある。お礼の気持ちをどのように表したらよいか、推敲する視点をもつことも大切だ。自分で問いをたくさん立てておいて、アドバイスをしたり、支援したりしていくこと、問いから子どもたちが学習を進めていくことも大事である。作文のテーマや学習材料が最初にあるのではなく、子どもの問いが最初に立てられるとよい。子どもは学習の中心、主体である。子どもたちが主体となって動き出すと、子どもたち自身で問いをつくるができるようになる。教師は子どもたちのよき理解者・共学者であるから、子どもたちの学びを支援することができる。今日の山本先生の実践は、感謝の気持ちを言語化していく授業となった。学びを生活にいかしていったほしいと思う。

--	--